
結婚詐欺

朋次郎

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

結婚詐欺

【Nコード】

N3774Q

【作者名】

朋次郎

【あらすじ】

犯罪小説の習作です。アンハッピーエンドがお嫌いな方はスルーしてください。

プロローグ

ある日ある時古本屋に行った。そこは私のお気に入り1冊100円のコーナーが充実している。そう、ときには売りにいったこともある。

その日は客があまりいなかった。平日開店早々の時間ならたいいのお店はすいているのではなからうか。私は当直明けで疲れていたが寝しなに読める軽いエッセイをさがしにきたのだ。まあ、このくらいならいいか、という本を2、3冊かかえてカウンターに行ったらちょうど売りに来た人がいる。

レジには店員が1人しかいなかった。本を売りに来た人を応対中だ。しばらく待っていたが妙なことに気づく。売りに来た人は高校生ぐらいの女の子2人だ。今風の髪を染めて制服のスカートを膝上まであげグラスファイバーで飾り立てたケータイを片手にしている。学校の創立記念日とかで休みなんだろうか？校名まではわからない。

その子達の持ってきた本は全部文芸書で新刊ばかりだった。こういうのは高く買い上げられるだろう。題名からして人気作家の分厚い新刊、妊娠出産関係の手引書、ビジネス本のハウツーもの、等等。

万引きであろうことはまるわかりだった。店員はアルバイトらしく何も言わない。もしかしてぐるかもしれないな……。私はなんとなくそう感じた。女の子達は頓着なくガムを噛みながら本に値段をつけられるのを待っている。

やがていくばくかの千円札を手にとさつさと店を出て行った。私はこの光景を見送る。多分彼女達は戦利品を売り飛ばしたお金でこれから買物にでもいくのだろう。罪の意識なんかなるでないのだろう。

一体どういう育ちでどういう教育を受けているのか？

・・・などとほざくことは私もしない。
だって人はひと。

今の世は大臣様だって汚職をする時代で珍しくない。宗教家だって税金を払わないで裕福に暮らしている。

私？私は虹子。ちなみに看護師。

白衣の天使だって？

はははは！

甘いね。確かに看護師は他人のお世話をしてさしあげる職業ですが。

そうそう私は看護師に飽きていたころだった。日直も準夜も当直もうんざりしていた。気の抜けない仕事、同僚とうまくいかない仕事、おもしろくともなんともない会話、わがままでつまらない医師。そういう時にあの子達を見たんだっけ・・・。

「起」

私は虹子。24歳の看護師だ。個人経営の中規模の病院に勤務している。忙しいだけの単調な生活だ。もちろん医療職ならそれなりにやりがいがあることはある。が、人の生死のドラマにも慣れてきてどうやら自分はマンネリの状態にあると感じる。看護師なんて私のガラにあわないわ、と思い始めた今日この頃だ。

そんなときにマルチにはまった。やってみるとこれが儲かるのだ。儲かるときはちまちま働くのがばかばかしいほど儲かる。最初に私を勧誘してきた高校時代の友人の友人の友人という男の子と今、同棲している。

私も勧誘する親になり、そのおかげで友人も何人かを失った。でも、平気。友達なんかいつでもすぐに作れる。

とにかくつまらない、この頃。いつか大金をつかんで大威張りでこの職場を出て行ってやる。

ところで同棲の相手は裕也という。同じ年だ。彼には得体のしれないところがあつて。そこがまた魅力なのだ。彼に言わせると私のことを世間知らずのお嬢さんだという。

お嬢さんだつて？

私が？

へへつてなもんよ。

ある時、裕也が言った。

「おい、誰か知らないか。独身の女で、金持ってるやつ。お前の職場にいないか」

私は即座に思い出した。

「ああ、いるいる。看護師だね。でも勤務している病棟が違つし、ほとんど話したことがないんだ」

夏の暑い日だった。裕也はだらしない恰好で、ビールの缶を舌を

つきだすようにして飲んでいる。

「いくつだ、そいつ」

「さあ・・・、でも40はこえていると思う。ケチで有名なのよ。その女」

「美人か、ブスカ」

「ブス・・・」

「だろうな」

「ちよつとね、顔に目立つあざがあるの。彼女はそれを気にしているらしい。慰安旅行やちよつとした飲み会の記念写真でも絶対に中に入ろうとしないの」

「あざ？そんなもん、整形手術で取れるだろう」

「形成手術よ。ホント、何でだろ。目立つあざなのになあ」

「その女の名は」

「絵念さん。下の名前は知らない。内科病棟にいるよ」

「よし、お前なあ、看護のことで相談があるとかいって、俺に引き合わせろよ」

「裕也、何を考えているの」

「ちよつとお金があるんでな」

「いくら？お金ならあげるわよ」

「お前のもっている金じゃ、たらねえよ」

裕也はするそうな目つきをした。彼が何を考えているか私は知らない。ただ時々、中年の男が裕也のところにくて話をしにくる。裕也に仕事をいつけにくるブローカーらしい。よくは知らないけれど。

虹子は絵念のことを思った。彼女とは看護師共同のロッカールームか食堂でしか見かけない。話をしたこともない。目立つ容顔のせいか、人は彼女をすぐに覚える。

が、彼女は笑顔を見せないむすつとした看護師だ。やせていて背が高いのに背骨をまるめて歩く。第一印象が悪くて損をしているタイプだ。

おまけに自分の身を飾ることを知らないのか、いつもどこで買うのだろうというような不細工な格好をする。色彩感覚もないらしく茶色や黒っぽい服を混ぜ合わせたような色の服を着る。

白衣に着替えれば、彼女も立派な経験豊かな看護師だ。が、性格が暗い。いつも下向きにぼそぼそしゃべる、らしい。

内科の患者も年寄りが多いので彼女のいう声が聞こえにくいという苦情がきたこともある。看護技術の手際は良いものの、患者を安心させたりする一言の声かけもしないので、やることはやっていても人気がないということも耳にしている。

裕也はそんな彼女に結婚詐欺をしかけるのか？確かに裕也はどちらかというと良い顔立ちをしている側に入るだろう。ホストもやっていたことだつてあるし。でも頭は悪い方だと思う。そんな彼が結婚詐欺・・・？

ケチで有名な絵念さんからどうやって金を巻き上げようというのか？これはおもしろい見ものだわ、と思った。

「仕掛けるのは俺じゃねえよ」

「え？あんたじゃないんの」

「専門のヤツがいるんだ」

「へえ、あんた、そんな知り合いがいるの。結婚詐欺をするんですよ。常習犯っているのねえ」

「いるさ。虹子、だからお前はお嬢さんだつていうんだ。世間のこと、何にも知らないからな」

「成功したら紹介料位はもらつてよ」

「もちろんさ！俺も一枚、かむからさ」

私は絵念さんに意識して近づいた。時間を見計らつて食堂で会う。それから隣の席に偶然をよそおつて座る。彼女に何気なく恋人の父親の介護について質問したりした。

絵念さんはよほど驚いたらしい。「どうして私に聞くの？」と不審そうに言うのだ。意外と用心深いのだ。

「あら、だって内科病棟に長くいらつしやるし、ずっと前からお近づきになりたかったんですもの。ねえ、教えてくだらない？彼も私じゃ心もとないらしく、アドバイ스가ほしいのですって。彼に一度会ってやって」

絵念はなかなか首をたてにふらなかつた。

「虹子さんでしょ？私、あなたのうわさをしているわよ。マルチ商法に手をだしているのですってね。私はあいにくとそういうことではお金は使わないわよ」

「チッ」

私は心の中で舌打ちした。

確かに私は何人かの同僚を餌食にしたわよ。強引なやり方でね。でも、それがどうしたっていうの。背の中弱肉強食じゃん。お金はないよりあつたほうがいいし、より多く持っている方が勝ち。私は氣をとりなおしさらに明るく言った。

「私は確かに過去マルチに手をだしましたが本当をいうと後悔しているの。それで何人かの友人も失ったわ。絵念さん、私は誓います。絶対に誘わないわ。本当。一筆書いてもいいわよ。私は相談したいだけの。私、相談できる友人もいなくなつて・・・」

それは本当だった。実をいうと今のところで勤務を続けるのはしんどい状況なのだ。マルチに巻き込まれたと私を恨んでいる同僚がいて何かとからんでくる。

・・・マルチをやるうか、やるまいかが最終的に決めたのは自分のくせに！まったく腹が立つわ。

いけない。話がそれてしまった。

「わかつたわ。それほどにまでいうなら会つわ」

絵念さんは意外とすぐにおれてくれた。少々押出しを強くすれば動いてくれそうだ。それにしても、私は考えた。

もし彼女が見事に詐欺にはまったら私も共犯に囚われるだろう。さつさと足を洗わないとね。

大金をもてたらこんな夢も希望もない病院なんかやめてやる・・・

o

「承」

あれから1カ月たったが、絵念さんの件はどうなったのか、裕也からはうんともすんともいってこない。絵念さんの携帯電話番号しか伝えてないし、ましてや会う時間も決めてない。もうやめたのか？ 聞いてみると裕也は言った。

「あの例の結婚詐欺？ ああ、あれ、どうなっているのかねえ」

「何も聞いてないのね？」

「いつもくるおっちゃんに言っただけだな、」

裕也も不審そうだ。例の目つきの悪い中年男が来たときに私の勤務先の病院と絵念さんの連絡先と容貌を伝えたという。その男が対象になる女を物色しているから、と裕也に頼んでいたという。私はまさか、と耳を疑った。

「ええ、あの不細工なおっちゃんが結婚詐欺師なの？ どこにでもいそうなオヤジじゃん！ あれなら絵念さんでなくとも、警戒するよ。だめだよ！ あんなの」

「ばか、何を言う。あれは仕事の仲介者だよ。待てよ、あいつは確か大がかりな仕事になりそうだから時間がかかると言ってたよ。そういうええしばらく音沙汰なしだよな」

私は絵念さんの用心深い性格からして、警戒されて詐欺を働けなかったのだらうと思った。

それきりでそんなことは忘れてた。

仕事の傍ら、私は少しでもお金を稼ぐべく、なべや下着の訪問販売まで手を出した。裕也は、風俗はいいぞ、と誘いかけるがとんでもない。

裕也は私のことを愛しているというが、かっとなると暴力をふるうやつだったことも、わかってきた。

裕也は口先だけの男だと思う。私が当直明けで仕事で疲れてくたいたになつて帰ってきてても、昼間から寝ているかパチンコになつて

くらいの日々を過ごしている。仕事を新しくはじめてもすぐに首になる。もしくは嫌になって3日でやめてしまう。

今年のお正月に帰省すると両親もそろそろ身をかためて安心させる、といってきた。が、裕也ではだめだ。両親にもあわせてはいないし、裕也の存在すら話をしていない。いい加減な性格の私とは妙にウマがあうので一緒に暮らしてはいるが、殴られてまでつれそうことはない。しかも、この頃の生活費はほとんど私が出しているし。

そうこうしているうちに職場で絵念さんについてのうわさが出てきた。彼女に恋人ができたといううわさだ。派手になって急に綺麗になったらしい。私はもちろんまさか、と思った。絵念さんとはあれから会っていない。彼女とは勤務サイクルが違うのでロッカー室でもなかなか会えないがようやく会った時には我が目を疑った。

確かに彼女は変わっていた。眼鏡がコンタクトに、ゆるやかにウエーブがかかったセミロングヘア。ひと目で高価だとわかるレースの下着。ガーターまで。ブランド物のバッグにシューズ。趣味の良いスーツ。

私服に着替えた彼女はどこからみても立派なキャリアウーマンだった。2か月前のやぼったい毛玉だらけのサマーセーターを着た彼女とは似ても似つかない。化粧もうまくなっていた。

私はちよつとなれなれしいか、と思ったが彼女に声をかけた。

「綺麗になられましたね。恋人ができた、ともっぱらのうわさでしたが本当でしたね」

絵念さんはぽつと顔を赤らめた。40歳超えた彼女が顔を赤らめるなんて！

おまけにはにかむなんて！でもその仕草がちゃんと似合っているなんて！

「お先に、失礼します・・・」

蚊の鳴くような声をだして、彼女はロッカー室を出て行った。同室に居合わせた外来の看護師が笑って言った。

「あの人の恋人、どうやらものすごい金持ちらしいよ。あの服、全部彼が買ってくれたのですって！」

「彼のお見立て？なるほど、以前の絵念さんはちょっとひどかったからねえ」

別の子が言う。

「女って男次第で変わるっていうけど本当ね。確かに彼女、綺麗になったわよ。上品でセレブぽくなった」

「よかったわね」

やがて絵念さんが結婚するらしいという噂が流れた。それと相手の詳細も。それは皆が驚く相手だった。

なんでも元華族の財閥の御曹司らしい。年は10歳も下だという。彼が一度、絵念さんの帰りが遅いのを心配して病棟まで迎えに来た時は大騒ぎになったらしい。

見た看護師の情報によると、某タレントにそっくりな「すごいキレイ」な彼ということだ。しかも真っ赤なフェラーリにのってきたとか。

こんな田舎にフェラーリ？バカじゃないの・・・？

なんでもきつかけは彼が土地の売買の仕事の一環で、別荘を何件か建てるためにこのあたりにきた。それで下見に来た時に小さな溝に足がはまって（バカ）怪我をして困っていたらしい。そこを、たまたま通りかかった絵念さんが手当てをしたらしい。そして恋が芽生えた、というわけだ。

豪華な宝石の贈り物をばんばんして結婚を承諾させてらしい。

すごい、すごすぎる！

一方、ほんとうかあゝという気持ちもある。

もし、その男が例の結婚詐欺師だとしたら、そうとうのプロだろう。裕也を通じて仲介者が動いて、プロが活躍したのだろう。裕也じゃ、だめだ。一枚かむ、なんていっちゃって、あいつはあちらの世界でも使えないんだろう。

「転」

私は裕也のことがだんだん嫌いになってきた。裕也もそれはわかってきたのだろう。結婚しよう、とかやさしくいったと思うと、お前のようなカス女はすぐに飽きる、と暴言をはく。殴ったりする。

しかし、この絵念さんの話をしたら裕也はめずらしく話の腰を折りもせずに、最後まで聞いていた。裕也は感心したような顔をしている。

「さすがじゃんか。聞いた話によるとな、彼女は三千万もの現金をもっていたらしいよ。それと、土地。おじいちゃんの相続でもらったらしいぞ。おまけに係累もろくにいなかったらしいな」

私は驚いた。

「それ、本当の話？どうして知っているの？」

「ああいうものは事前のリサーチっていうものが必要なんだよ」

「ふううん。もうお金を取ったのかしら」

「さあなあ。でも、成功したらいくらかはくれるだろう」

その時私は、少しだけ胸が痛んだ。絵念さんは何もしていない。誰にも不愉快なことはしていない。だけど、彼女はだまされてお金を取られようとしているのだ。

今は結婚を申し込まれて有頂天になっているかもしれないが、その分真実がわかれば打ちのめされるだろう。それでも、私はもう少し様子を見ようと思っていた。それに心の中では他人の破滅を見たいという欲望もある。鬼のような性格と思われるかもしれないが、正直な感想だ。

ある時、準夜勤のために昼遅くに出勤しようとしたら、例の中年男が駅にいた。

裕也に用があるのか、と思っていたら彼は私を待っていたという。今までその中年男が裕也を訪問し、部屋にいる私を見かけても、会釈もしないし話しかけたこともないから驚いた。彼は改めて自分は

城田である、と名乗った。少しの間ですから、ということでは立ち話をした。私達のアパートまでくると裕也に聞かれるしそれはまずいからだろう。

「絵念さん、という方の話ですが、」

「はあ、やはりきつかけは私からの話で・・・」

「そうです。あれはよい情報提供をしていただきました」

城田はあくまでも事務的だ。まるで明日の天気をいうように、他人の幸せをつくってこわす話をした。

「彼女の件はだいたいにおいて、成立しました。これは御礼の小切手です。くれぐれもご内密に」

「はあ、」

「中をお確かめください」

封筒に入れられた小切手の額面はなんと五百万円！

頬がかあつと熱くなつたのを自覚した。

一体彼ら一味は絵念さんからいくらの金を引き出したのだろう。

私はこれだけのお金をもらえたのはうれしかったが、絵念さんの行く末が急に心配になってきた。

「彼女が悲観して自殺したりしないかしら？そうになると後味が悪いわね」

「何のことですか」

城田は笑った。

「あの・・・、結婚詐欺」

「だからそれ、何のことですか」

私はぽかんとした。そして理解した。

「ああ、わかりました。なんでもありません」

城田が初めて声を出して笑った。

「虹子さんだったね。あんた、お嬢さんだね。他の女の子とより自分のことを心配したらどうだ」

「は？」

「裕也だよ。あいつは悪い奴ではないが、女に寄りかかって食いつ

くだけの能なし野郎だ。心底悪い奴でもないから、仲間には入れられないし、かといって堅気の世界にはなじめん野郎だろう。ああいうのは使い物にはならん。だから最初から話にかませなかったんだ。あいつよりもまだ君の方が見どころあるよ。なんだって現役バリバリの看護師様だし」

私は言っている意味はよくわからなかったが、裕也とは一生一緒に暮らせないとは思っていた。

城田は言った。

「俺たちに協力してくれたから、忠告してやるんだ。裕也と一緒になったらまともな人生を送れなくなるよ」

まともな人生・・・？何、それ？

城田は言うだけ言うと、さっさと駅を出て行った。まだ人通りのある駅構内で私はぽつんと立っていた。

「結」

500万円の小切手のことは裕也には黙っていた。絵念さんのことも黙っていた。城田に会ったことももちろん黙っていた。

私は銀行に別に口座を作り、通帳も印鑑も勤務先のロッカーに入れておいた。裕也はこの引き出しに金があるかよく心得ていて、好きな時に勝手にお金を取り出してしまふからだ。

絵念さんの恋が破局したという噂なんか全然たなかつた。あいかわらず、彼女は幸せそうだ。何か月前の彼女とはまるで別人だ。声を出して笑うようになったし、大きな声であいさつするようになった。例のあざもいつのまにか、レーザーが何かで取ったのだろう。良く見れば彼女は40歳過ぎにしては透き通るような綺麗な肌をしている。

幸せそうな彼女は、恋人にいくら払ったのだらう。ある時私は絵念さんに食堂で会ったときに話をする機会があつた。まわりに人がいたが仕方がない。私だって興味深々なのだ。いつもぽつんと1人でいた絵念さんだったがいつしかまわりに人がいるようになっていく。

「あのく、いつ結婚されるのですか」

「ああ、まだ、それは・・・」

絵念さんは口をすぼめて笑った。

「今、家を建てているの・・・」

誰かが言った。

「まああ、すてき！どこで？」

「カナダよ」

「カナダ！」

「モントリオールっていうところだね。まだ私は現地へ行ったことはないのだけど」

「いいわねえ、もうすっかり上流階級の人みたいね」

「ふふふ、彼もこれから海外を拠点にして会社を動かすらしいから、
私はもう我慢できなくて口をはさんだ。」

「あの、どういう会社ですか」

「貿易関係よ。私、重役になったのよ。彼は今、あちらにいるので
会社が軌道にのってあちらで新居が完成次第、現地で式をあげよう
って」

皆、感嘆の声をあげた。黙っているのは私だけだ。

「あの、絵念さん。じゃあ、看護師は辞めるのね、会社の重役では
「そういうことになるわね。でもまだ時期が確定していないのでも
う少し勤めるつもりなの。彼もそうしたほうがいいって」

私は彼にいくら払いましたか、と聞きたくてしかたなかったがそ
れは当然やめておいた。

きつと絵念さんが家のお金やら会社設立や運転資金のお金をだし
ているに違いないからだ。彼のプレゼントといって最初に与えられ
た宝石類もあとで何かの名目でお金で取られたに違いない。結婚詐
欺にかかわらず、詐欺ってスケールが大きいほど人は疑わないらし
いし。。

いいわねえ、うらやましいわあ、の合唱を背景に私は席を立つ。
いたたまれなくなったのだ。してみると、良心と言うモノを少しは
持ち合わせているみたい。匿名で気をつけるようにと電話か手紙で
よほど忠告しようとも思った。が、そんなことをすれば自分がやつ
たとわかるだろう。絵念さんではなく、その相手に。

ここは陽のあたる堅気の世界だ。が、法に守られないアウトロー
の世界では、非常識が常識になる。裕也はアウトローの世界に片足
つつこんでいるので、変な話もちよくちよく聞いてくる。

新聞沙汰や刑事事件になるのはごくごく氷山の一角なのだ。

そうして虹子は500万円を手に病院をやめた。前から居心地が
悪かったし、やめてせいせいしたのも事実だ。

騙すより、騙される方が悪いと思う。自分で自分の身も守らない
といけないと思う。

エピローグ

あれから虹子はどうしたか？

まず裕也と手を切った。裕也は女を金づるとしか思っていない。別れたくない、というのでもめていたが城田と連絡をとって追っ払ってもらった。以来、城田の世話になっている。

今、虹子はある非合法な手術を専門にやる医院で看護師をしている。そこでは麻薬常習者を診たり、不法在留外国人や保険証のない患者を診たり、指紋をとる手術などいろいろ公にできないことを専門にやっている。そんなところがあるなんてちつとも知らなかった。でも、あるのだ。

風の便りに絵念さんが失踪したと聞いた。カナダで行方不明になったそう。元の同僚に連絡をとってみたらどうも彼の会社がうまくいかなかったらしいところまでしか知らなかった。まあ当然か。ニュースにもならなかった。

虹子は絵念さんが幸せな気分のみままで消されたのならいいなあ、と思っている。

もらった500万円はすぐになくなった。何に使ったかよく覚えていない。ブランド品を買ったり海外にも遊びに行った。もっと儲けようと先物取引にも手を出したら本当にあつという間にお金がなくなった。それはもう見事になくなった。以前よりも貧乏になったかもしれない。

悪銭身に付かずとはよく言ったものだ。けれど基本的な衣食住のお金には困らない。破格のお給料で雇われているからだ。虹子は退屈な生活よりも刺激的な生活の方を選んだのだ。悔いはない。

前に見た古本屋で万引き本を売り込む少女たちに虹子は言いたかった。将来の保証こそないけれど、退屈な人生をより刺激的に送りたかったら退屈な毎日を過ごしている人間をターゲットにして悪事

を働くのも退屈はしないよって。良心の呵責にときには責められて眠れぬ夜を過ごすのもまた退屈はしない。

そりゃ私は鬼畜の側の人間だし、将来の保証なんか何にもない。でも、そう思うのだ。

そうそう、こんな私を気に入ってくれた人間がいてなんと結婚しようという。年は私よりも20歳も上だ。実家の両親はびっくりするぞ。

だけど、ダークな世界では名の知られた人だからのってみるのもいいかな、と思う。だって刺激的な人生って本当におもしろいもん。城田は何も言わないけれど、彼と一緒にになったら4人目の奥さんになるけれど、それで君がいいならばと言う。

4人目の奥さんかあ。だったら愛人も隠し子もいるだろう。修羅場があるかもね。だから私、虹子はただいま思案中だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3774q/>

結婚詐欺

2011年4月26日03時40分発行